

「運動の神経機構とその障害」

島村 宗夫 中村 隆一 編

運動機能に関する神経生理学的研究は数多くあるが、PT, OT の治療手技と直結したものはそう多くはなく、またわが国においてはことさらに少ない。

本書は編者の島村・中村両先生をはじめとした東京都神経科学総合研究所の諸先生方の貴重な研究論文が、次のような内容でまとめられたもので臨床面に示唆するところが非常に多い。なお、研究の中心課題に入る前に、一般的事項（歴史、用語の解説など）にも力が注がれており、リハビリテーション医療の現状をよくとらえている。

I 脊髄の内景——腹角運動ニューロン野を中心として

II 運動の反射生理学——特に脳幹網様体の関与について——

III 反応時間測定による運動解析

上記3つのグループの論文では、下位レベルでの中枢神経機構の理解が深められ、また研究方法や、データ処理のしかたを学ぶための参考になる。

IV ファシリテーションテクニックの解析

ここでは、特に“技術を科学へ”という臨床医学の立場を明確にし、PNF にメスが入られている。Kabatらの理論が仮説的である部分（reversal of antagonists）が見出されたが、治療手技として有効であることも明らかである。

V 脳性麻痺の運動・動作障害

VI SMON の運動・動作障害

これら2つのグループの論文は、上位レベル、下位レベルの代表的な運動・動作障害をもつもので、臨床へ提供するものが多い。

全体を通して豊富な図表は私たちの理解を助け、また今後の研究の資料としても貴重である。くりかえし、ていねいに読むことによって価値が倍加してくる含蓄の多い書といえる。

（医歯薬出版，304頁，6500円，1975）

（大阪府立盲学校，理学療法士 西本 東彦）

「教授工学入門」

沼野 一男 著

著者沼野一男先生に始めてお会いしたのは昭和48年2月に開かれた東京病院付属リハビリテーション学院での臨床指導者のための研修会であった。その後、PT, OT 養成施設等教員講習会の東京地区に於ては昭和49年度及び50年度の2回共、多数の時間をお話いただいたので、読者にはおなじみの方も多し、この本はその時に教科書として用いられたものである。著者は慶応義塾大学文学部の出身で現在は玉川大学の教授をしておられるが、教授方法について看護婦さんとも研究会をもっておられ、その教授方法についての明解な理論は私共の目を開き、講習会でも大変好評であった。

この本は教育の効率化の要求から生れた「教育機器」についても述べているが、何と言っても私共が考えを新たにしたのは「教授方法の明確化」ということである

う。——「教える」とはどういうことか——から始めて、教授目標をどう設定するか、教授計画をどう決定するかの章が読みどころと言える。

教授工学というと少々とっつきにくい感もあるが、さすがに教育学の専門家が書いてただけあって、独習でも十分わかるように具体例をとり入れながら書かれている。講習会受講者の殆んど全員が感銘をうけたように著者の理論には説得力があり、学院で或いは臨床の場で学生の教育にゆきづまっていた私共に一抹の希望を与えてくれた。是非一読をおすすめしたい。

（玉川大学出版部 184頁 ￥880 1974）

（国立療養所東京病院付属リハビリテーション学院

作業療法学部 小川 恵子）